

益田明美さんを悼む

福 武 直

私が益田さんを知ったのは、一九六七年のことである。この年、私は明治学院大学の大学院の講義を依頼された。東京大学大学院の院生諸君と共同の実習で責を果すという条件でひきうけ、秋田県金浦町の調査を試みたが、益田さんは、これに参加したのである。

益田さんは、同大学の村山冴子さんと、ひとつの部落を担当し、協力して報告をまとめた。調査前のインスタラクションから、調査の実施、帰京後の数回におよぶ報告会、そして執筆に至るまで、彼女は熱心に仕事をした。まことに真面目な学生であった。

その後、村落社会研究会にも会員の一人として関与したが、明治学院大学が事務局をひきうけるに当って、彼女は、川本彰君のもとで事務をとり、村研にとって欠くことのできない会員となった。研究報告も行ない、金浦町調査当時の大学院生から、一步を進めて、研究者として成長していった。

私は、彼女の真摯な努力が、今後着実に稔ってゆくことを期待していた。ところが、突然、彼女の逝去を知らされた。丈夫そうであった彼女が、どうして急逝したのか、その訃報に接して信じがたく、いつかは立派な業績をあげるであろうという望みがたちさられたことが残念でならなかった。

しかし、今では、もう「益田さん、安らかに眠って下さい」というほかはない。そして、研究者に男女の差はないとはいえ、現実には女性の研究者が少なく、その道が困難にみちていることを考えると、「きつと村研の女性会員も、あなたの死を補う活躍をしてくれるでしょう」というとともに、この言葉が嘘にならないようになってほしいと思うのである。